

全般季節予報支援資料 暖候期予報

2024年4月23日

予報期間：2024年5月～2024年8月

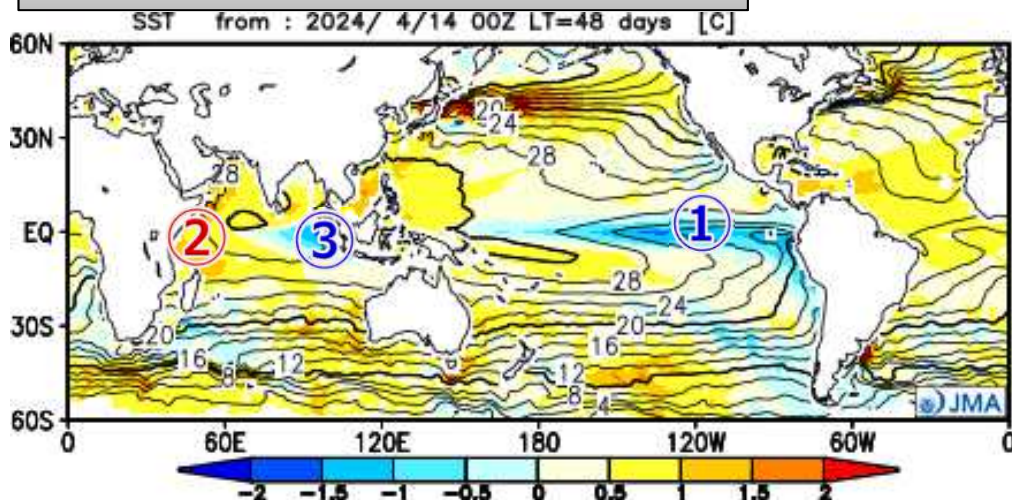
この資料は、気象事業者等が、気象庁の提供する季節予報の根拠を理解するための補助資料であり、そのままの形で一般に提供することを想定して作成したものではありません。

熱帯の海面水温や対流活動の特徴に前回の予報との大きな違いがなく、予報根拠の変更がないため、2月20日に発表した暖候期予報の夏(6～8月)の気温、降水量に変更はない。

暖候期（6～8月）の予報資料の解釈

暖候期(6~8月)の予報資料の解釈 海面水温

海面水温 等値線: 2(C)ごと; 陰影: 平年差()



エルニーニョ/ラニーニャ現象の発生確率

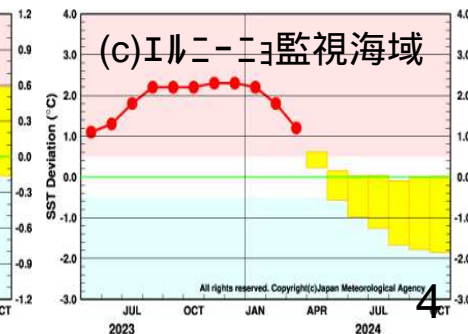
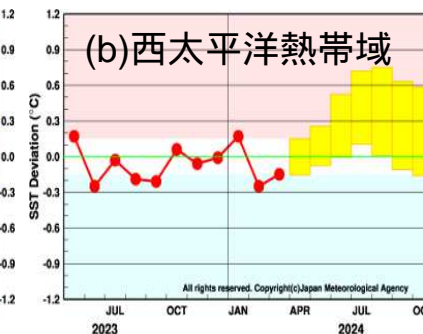
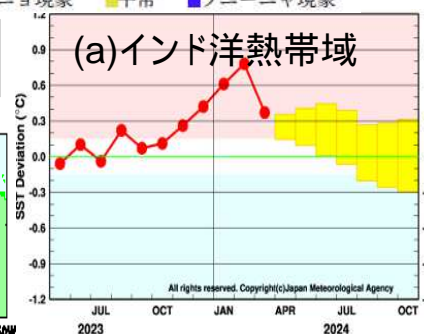
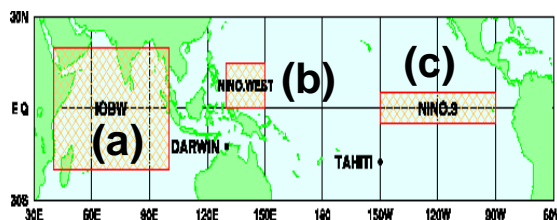
エルニーニョ/ラニーニャ現象の発生確率
(予測期間:2024年2月~2024年8月)

年	月	平均期間	エルニーニョ現象	平常	ラニーニャ現象
2024年	2月	2023年12月~2024年4月	100	0	0
	3月	2024年1月~2024年5月	100	0	0
	4月	2024年2月~2024年6月	50	50	0
	5月	2024年3月~2024年7月	20	80	0
	6月	2024年4月~2024年8月	10	70	20
	7月	2024年5月~2024年9月	0	60	40
	8月	2024年6月~2024年10月	0	50	50

■エルニーニョ現象 ■平常 ■ラニーニャ現象

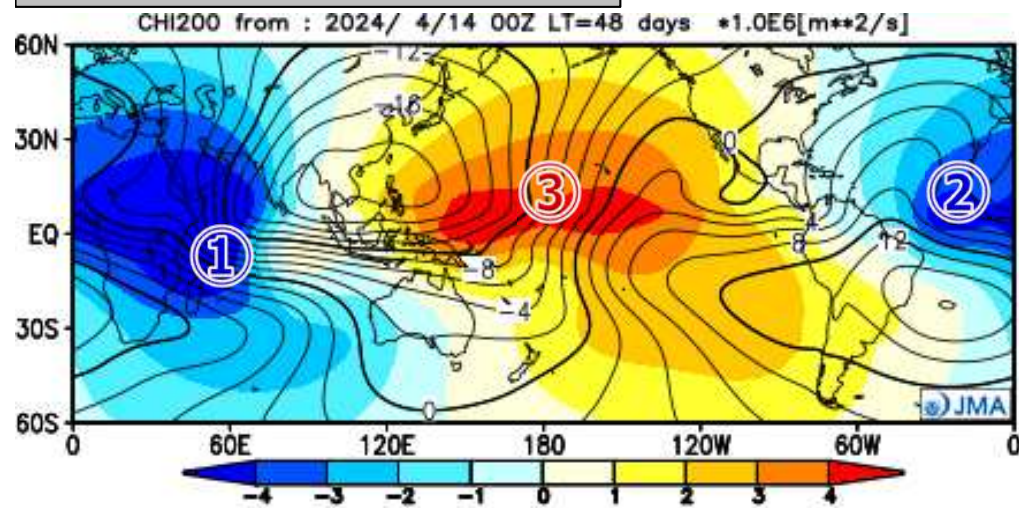
- 4/10エルニーニョ監視速報 「今後春の間にエルニーニョ現象が終息して平常の状態になる可能性が高い(80%)。その後、夏の間にはラニーニャ現象が発生する可能性と平常の状態が続く可能性が同程度である(50%)。」
- 太平洋赤道域では、エルニーニョ現象の終息に伴い、中部~東部で**負偏差**。
- インド洋熱帯域では、終息したエルニーニョ現象の遅れ応答により、西部を中心に**正偏差**。東部で**負偏差**の領域を予測しているが予測の不確実性が高い。
- 春まで続くエルニーニョ現象、及びインド洋熱帯域(IOBW)高温による大気や日本の天候への影響が検討の最大のポイント。

監視指数の経過と予測



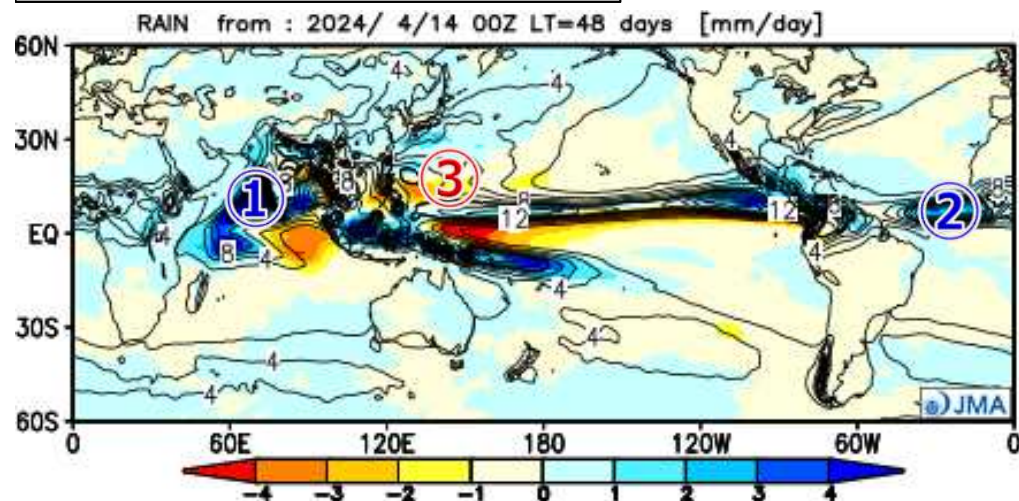
200hPa速度ポテンシャル

等値線: $2(10^6 \text{ m}^2/\text{s})$ ごと、陰影: 平年差 ($10^6 \text{ m}^2/\text{s}$)



降水量

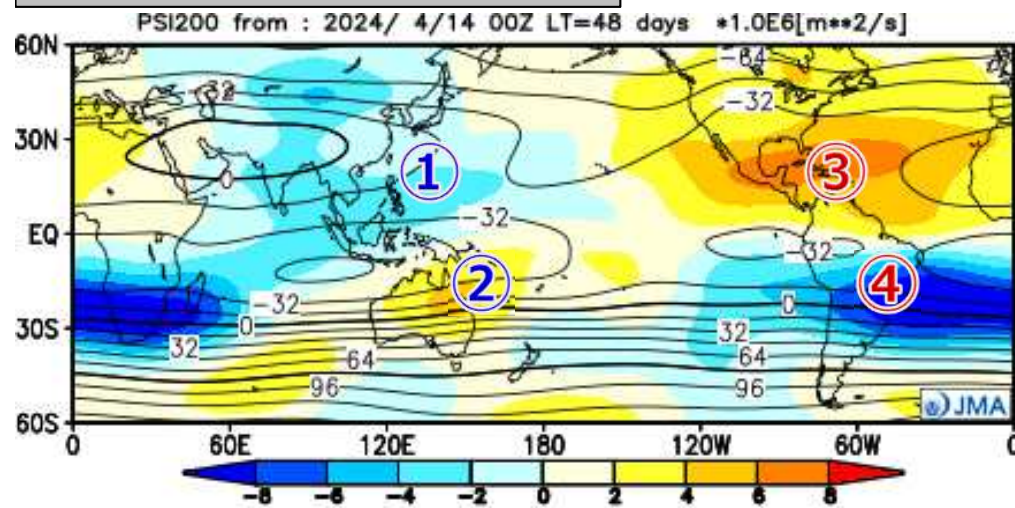
等値線: 2 (mm/day)ごと、陰影: 平年差 (mm/day)



- 降水量: 海面水温分布に対応して、インド洋熱帯域では**対流活発**。また、大西洋熱帯域でも**対流活発**。一方、太平洋赤道域はフィリピン~日付変更線付近で**対流不活発**。
- 200hPa速度ポテンシャル: 対流活動に対応して、インド洋熱帯域西部と大西洋熱帯域を中心に広く**上層発散偏差**。一方、太平洋熱帯域は広く**上層収束偏差**。

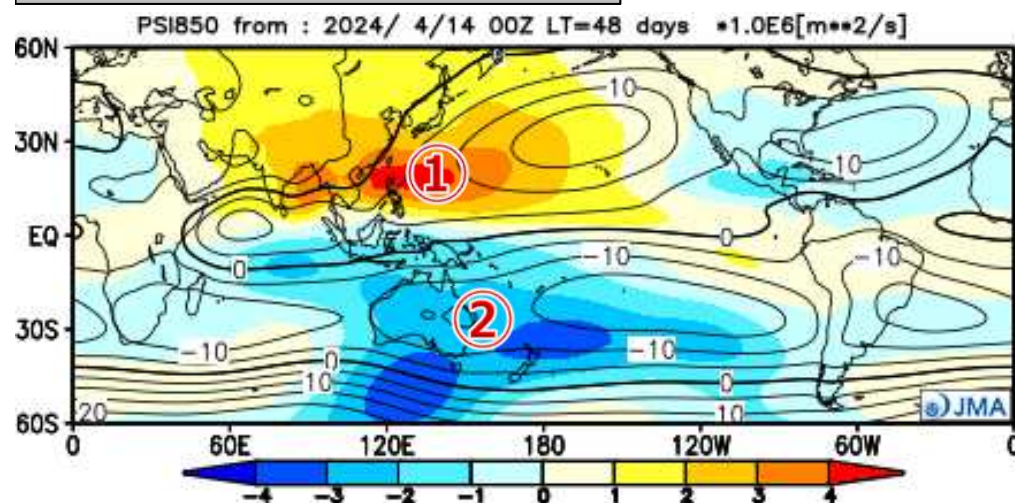
200hPa流線関数

等値線: $16(10^6 \text{ m}^2/\text{s})$ ごと、陰影: $(10^6 \text{ m}^2/\text{s})$



850hPa流線関数

等値線: $5(10^6 \text{ m}^2/\text{s})$ ごと、陰影: $(10^6 \text{ m}^2/\text{s})$

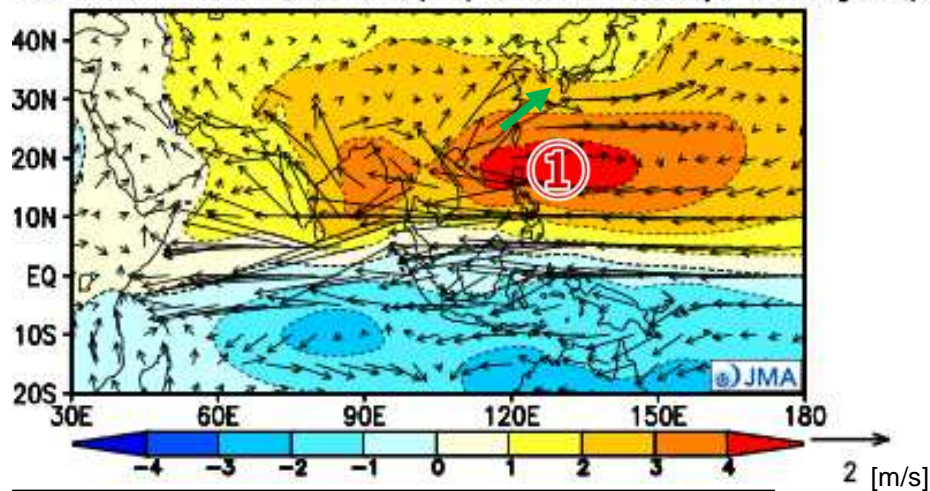


- 200hPa流線関数: 太平洋熱帯域の対流不活発に対応して、太平洋熱帯域西部では赤道を挟んで**低気圧性循環偏差**が見られる。大西洋熱帯域の対流活発に対応して、大西洋熱帯域西部では赤道を挟んで**高気圧性循環偏差**が見られる。
- 850hPa流線関数: 太平洋熱帯域の対流不活発に対応して、太平洋熱帯域西部では赤道を挟んで**高気圧性循環偏差**が見られる。上層との傾圧的な構造が顕著。
- 日本付近では亜熱帯ジェット気流はほぼ平年の位置を流れると評価する。(梅雨前線の位置もほぼ平年と評価)

850hPa流線関数平年差及び風ベクトル平年差

陰影: 850hPa流線関数 平年差 ($10^6 \text{ m}^2/\text{s}$)、ベクトル: 850hPa風ベクトル平年差 (m/s)

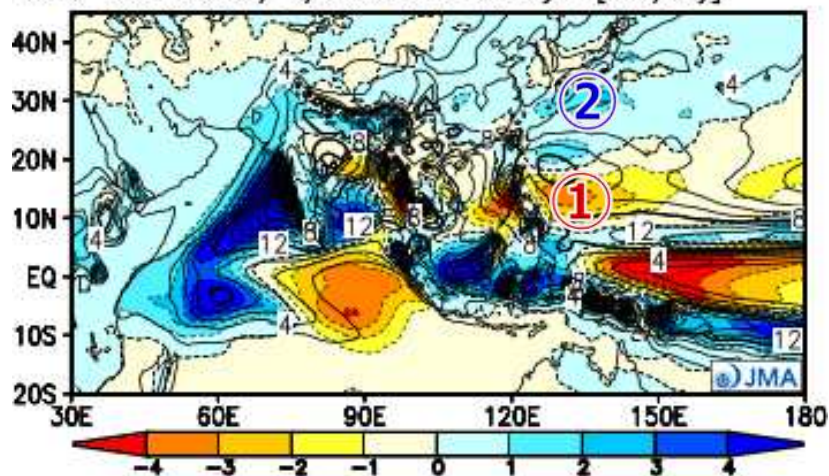
PSI850 & wind850 from : 2024/ 4/14 00Z LT=48 days *1.0E6[m**2/s]



降水量及びその平年差

等値線: 2 (mm/day)ごと、陰影: 平年差 (mm/day)

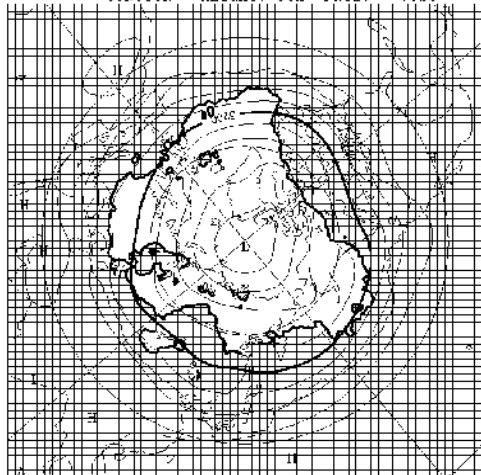
RAIN from : 2024/ 4/14 00Z LT=48 days [mm/day]



- 下層循環(850hPa流線関数)は、対流不活発に対応してフィリピンの東を中心に**高気圧性循環偏差**。このため、九州や沖縄・奄美を中心に南西風偏差となり、暖かく湿った空気が流れ込みやすい。
- 対流活動(降水量)は、フィリピン～日付変更線付近で**対流不活発(少雨偏差)**。その北側の日本の南は弱い**多雨偏差**。
- 日本の南や日本付近の降水量の予測精度は低い。一方、フィリピン付近の下層循環の予測精度は比較的高い。日本付近に暖かく湿った空気を流入させやすい傾向は採用。

暖候期(6~8月)の予報資料の解釈 北半球の予測

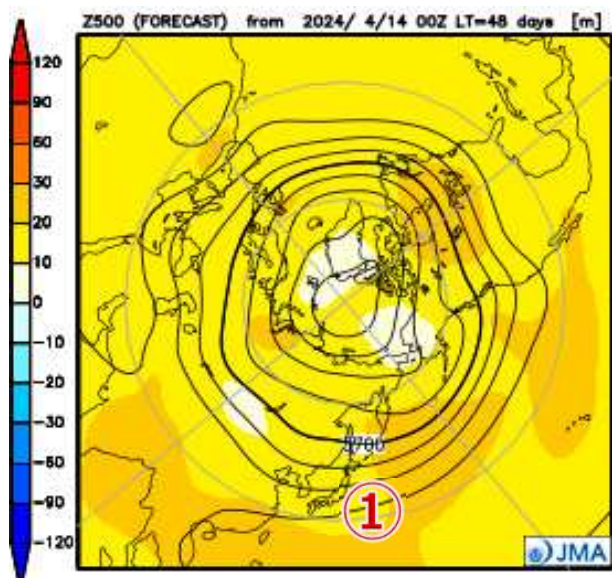
3 MONTH MEAN (6/ 1- 8/31) N:51
PROB. OF T. ANOMALY AND HEIGHT
CONTOUR HEIGHT: 60m PROB. 0.25



- 500hPa高度: 北半球は全球的に**正偏差** で、高緯度を除いて正の高偏差確率50%以上の領域に覆われる。日本付近も**正偏差** で、全国的に正の高偏差確率50%以上の領域に覆われる。
- 850hPa気温: 500hPa高度に対応して日本付近は**高温偏差** 。
- 海面気圧: 日本の南は**正偏差** で太平洋高気圧が西に張り出す。北・東・西日本付近は**負偏差** だが偏差は小さい。

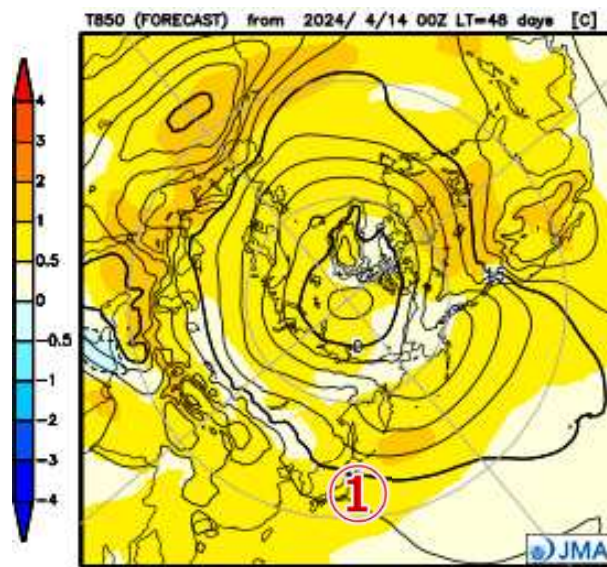
500hPa高度

等値線: 60(m)ごと、陰影: 平年差 (m)



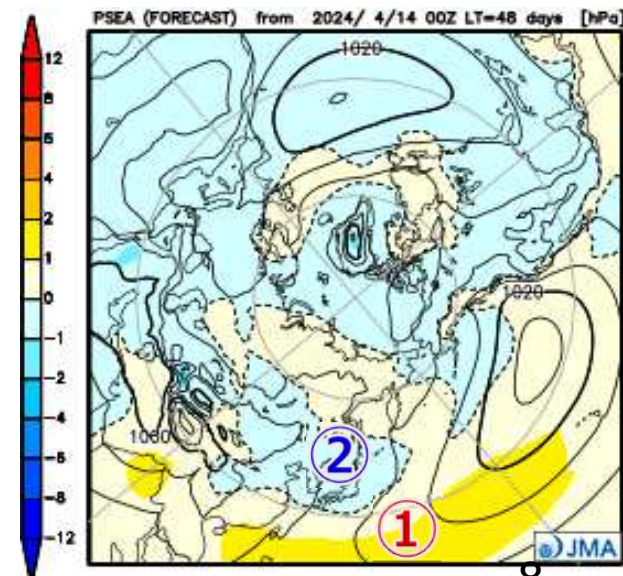
850hPa気温

等値線: 3(C)ごと、陰影: 平年差 (C)



海面気圧

等値線: 4(hPa)ごと、陰影: 平年差 (hPa)



中緯度層厚換算温度 高い(+1.0 程度、北半球全体も同程度)

= > 地球温暖化や春の間まで続く可能性が高いエルニーニョ現象等の影響により全球でかなり高い。

気圧配置(地表・対流圏下層)

全球的な高温と中緯度帯の高温が顕著で、日本付近も暖かい空気に覆われやすい。また、太平洋高気圧が日本の南で強く、日本付近には暖かく湿った空気が流入しやすい。

夏の予報

暖かい空気に覆われやすいため、気温は全国的に高い。太平洋高気圧の縁を回って暖かく湿った空気が流れ込みやすいため、梅雨の時期(北・東・西日本では6月から7月、沖縄・奄美では5月から6月)の降水量は、西日本太平洋側と沖縄・奄美で平年並が多い。

